

## 調べ学習への物語創作の導入

「総合的な学習の時間」における調べ学習をより深いものにするための一方法の提案  
(調べた内容をネタにする物語創作の方法)

Introducing the Story Writing Method into Investigating a Local Legend  
in the Comprehensive Study Class : SOUGOUTEKI NA GAKUSYU NO JIKANN

大河原清\*

(2004年2月5日受理)

OOKAWARA Kiyoshi

岩手大学

Iwate University

あらまし

地元盛岡市内にある円光寺にまつわる伝説「お蓮女と首塚」を題材として、小・中・高校教員を対象に、物語の創作を3回実施した。第1回では、51名中約75%の教員が物語の創作が楽しかったと報告した。第2回、第3回を実施し5段階のアンケート調査結果も、「どちらでもない(3)」と比べると、「物語の創作が楽しかった」は第2回の44名の平均値が4.5、第3回の21名のそれが4.7と高く、その他の項目も3より大きく好意的な回答が多かった。創作活動を観察した結果からは、教員同士のグループ活動が活性化すると共に、地元の歴史的事象に対して関心を深めていることが分かった。

地元伝説をネタに物語創作をする方法(一種の再話に相当)は、「総合的な学習の時間」における調べ学習に適用できるのではないかと思う。調べ学習において、課題として、調べた内容をネタに新たに物語を創作することを導入することで、深い調べ方が身につくのではないかと想定するためである。

キーワード：物語創作 総合的な学習の時間 調べ学習 円光寺 お蓮女と首塚 キリシタン殉教  
岩手県 藤沢町 大籠

### 1 はじめに

講義内容の中に、講義内容に関連する一種の問いとして、地元伝説を素材として新たに創作物語をグループで作成すること〔以下、「物語創作」と呼ぶ〕という課題を提示した。受講生は新たに創作することとグループ作成という方法とに最初は戸惑いを見せるが、創作活動に熱中して取り組むようになった。本報告の被験者は、受講生として教育職員免許法または大学院の免許法認定公開講座のた

\*岩手大学教育学部

めに、積極的に単位取得を目指す者である。

この物語創作の方法は、現在行われている「総合的な学習の時間」における調べ学習において、レポート作成のレベルに留まることなく、一層深い調べ学習を可能にする、いわば一種の問いかけとして有効ではないかと考える。つまり、地元伝説の提示によって、不足する情報を自ら収集し、物語創作という課題解決に向けて、資料の深い読み込みを通して新たに歴史的事実をつなげるための想像が、新しいことを創り出すという喜びにつながっているのではないかと確信する。

## 2 実施状況と被験者

物語創作は、これまで3回実施してきた。実施回数を表1における①、②、③で示す。一回目①は、2003年1月7日から10日に、免許法認定講習「教育コミュニケーション工学特論」の課題として実施したものである。被験者数は51名であった。二回目②は2003年8月6日から8日に、教員免許法認定講習科目「教育とメディア」の課題として実施したものである。三回目③は、2004年1月6日から9日に、免許法認定講習「教育コミュニケーション工学特論」の課題として実施したものである。

表1：物語創作の実施回数①～③と実施期間

回数	①	②	③
期間	2003/1/7・8・9・10	2003/8/6・7・8	2004/1/6・7・8・9
被験者数	51名(男16・女35)	44名(男20・女24)	21名(男8・女13)
教師経験年数	3～33年	2～30年	4～32年
男	平均 男15.4年	平均 男10.4年	平均 男14.6年
女	女19.9年	女20.5年	女16.1年
校種別	小 21名12～26年 (平均18.8年)	小 12名7～24年 (平均17.1年)	小 5名9～26年 (平均14.8年)
在職年数	中 11名09～28年 (平均21年)	中 8名4～26年 (平均15.9年)	中 2名7～11年 (平均8年)
	養護04名04～33年 (平均18年)	幼稚園10名6～30年 (平均17.3年)	養護8名4～32年 (平均17.1年)
	高校15名03～32年 (平均16.5年)	高校14名2～30年 (平均13.9年)	高校6名8～23年 (平均16.2年)
実施場所	岩手大学学生センター棟2F(G22教室)		

注：②の在職年数は(生年月日-22)歳として換算した値を用いている

## 3 実施方法

①第一回は、盛岡市内の地元の伝説「お連女と首塚」(平野 1976, 末尾資料一参照)のみを提示して、この伝説を土台にして新たに創作物語を作りなさいという課題を出した。純然たる創作というよりも再話に近いものである。必要な関連資料は各自、図書館で調べるように指示した。②第二回と③第三回は、講義時間への配慮と図書館での調べ学習時間の節約のために、図書館での調べ学習をあまり強調せずに、伝説「お連女と首塚」の他に関連資料として、伝説「不来方城の虎」(深沢・佐々

木編 1957)、歴史資料として「南部のキリシタン」(山田 1975)や「殉教の地 盛岡の切支丹」(吉田・及川編著 1983)その他を提示した。特に二回以降は必ずグループ作成するように指示した。

物語創作の課題をグループ作成するようにしたのは、以下の理由による。

(1)授業において共同学習(コラボレーション)を重視した。ヴィコツキーの対話(弁証法)的構成主義(Dialectical Constructivism)では、知識が社会的な相互作用や経験に基づいて構成される(Woolfolk, A.E., P.H.Winne, N.E.Perry1998)。これは、現代的な意味でのグループ学習の意義の確認と考えた。そこで、学習形態として、お互いがコミュニケーションを図りながらグループとして一つの課題解決に取り組ませることとした。

(2)課題として講義内容の中に物語創作を取り入れたのは、講義がコミュニケーション理論に基づいて、教師から学習者にわかりやすく伝達するには、言語メッセージを変更することで可能となることを示すことと、メッセージ表現のレベルを抽象的なものから、より具体的なレベルに移して表現することの必要性に気づかせること(講義内容としてS.I. ハヤカワの「抽象の梯子」を説明した)、さらに(3)「総合的な学習の時間」における調べ学習を、より深みのある調べ学習へと変化させるための手だてとして、物語創作という課題を一種の問いとして受講生に投げかけることで、調べた内容を新たに吟味することの必要性を強調した。レポート作成のための単なる調べ学習で終わりにはしたくなかったからである。

次に物語創作にあたって、講義との関連での下準備について述べる。(1)学習者に伝達可能なのは、意味ではなく意味を作り出す刺激となる言語メッセージであることを説明した。言葉の意味を学習者が作り出すという立場の主張である。(2)前述の通り、次にS.I. ハヤカワの意味論から「抽象の梯子」を取り上げ、わかりやすい伝達のために、抽象の梯子を抽象レベルの高次な方からより具体的な低次のレベルに下がることを説明した。(3)次いで、受講生が多様なことから、特に文章を作ることの得手不得手を考慮して、誰でも作文ができるということを示すために、作文練習を取り入れた。四行作文、見たこと作文、なりきり作文(へんしん作文)である。上手に書こうというよりも、下手でも必ず表現できるということを強調して、文章を書くことに自信を持たせた。

三番目に、普通の物語創作とは異なる点について述べる。それは、地元の伝説など歴史的題材に基づいて物語を創作させるようにしたことである。地元の過去の出来事を、既に学習してきた中・高等学校の歴史教科書の知識や、現存する当時の江戸時代の歴史資料に基づいて考察することで、日本全体の歴史の中で地元がどのようにかかわっていたのか、あれこれと想像を巡らせることで、地元の歴史理解に目を向けさせたことである。特に③第三回の実施では、現在ばかりでなく、約四百年前においても、岩手県という地域が国際社会の大きな流れの中に位置づいていたことを示すために、キリシタン殉教に関する伝説であることを強調すると共に、殉教に関連する資料を取り上げた(田中 1993)。これは国際理解教育の一環として位置づけている。

キリシタン殉教にかかわり付言すれば、1550年頃から、最初は鉄の精錬のための技術を有する人々が岩手に招かれたと考えられる。現在の岩手県藤沢町大籠地区であるが、江戸時代は伊達藩の領土である。その人々がキリシタン信者であり、優れた技術を伝える人々に感化され地元でキリスト教が広まったと考えられる。そして、島原の乱やキリスト教禁止のために迫害された信徒が、まだ迫害が厳しくない岩手に逃れてきたらしい。ところが徳川幕府が成立し確固たる体制を整えると共に、自給自足の経済体制の確立と、士農工商という身分制度の確立のために、西洋の進んだ思想や文化の流入を禁止するために鎖国やキリスト教禁止という措置がとられたものと思われる。神のもとに平等という考えは、将軍よりも神が高位に位置することも含め、絶対的な身分制度の確立に反するからである。

徳川幕府の成立以前、東北地方の後に一つの藩となる南部領や、伊達領の北上、藤沢付近は、鉄の精錬技術の伝搬と共にキリスト教も広まり、文化的・思想的にもけっして当時の中央から遅れた存在ではなく、中央支配から免れ、むしろもっと自由にあたかも一種の桃源郷のような世界が生じていたものと想像する。エミシや熊襲の住む野蛮な地方ではなかったのである。キリスト教禁止以前は、むしろ文化的先進地域、民衆の自由な活動が生き活きと営まれていた地域を、私自身は想像している。

#### 4 物語作成手順と講義内容との関連

物語創作のための手順は、以下の通りである。

(1)元となる歴史資料(地元の伝説)を読む。(2)印象に残る場面について、短い作文を書く。これが一つのシーンとなる。(3)シーン同士をつなぐことで、ストーリーを構案する。あらかじめ構想した粗筋の連結である。(4)ストーリーが歴史的事実や地理的状况に合致しているかを、現存する歴史資料に再度当たり確認する。できるだけ歴史的事象に合致させることで、本当らしさを求める。(5)シーン表現を会話を含むものと、表現が具体的になっているかどうかを再考し再構成する。(6)全体を繋いで、読み合わせをして確認する。

実施の2回以降は、他のグループの作品を読みたいという希望から、(7)グループによる創作物語の発表会をすること、を追加した。

なお、①第一回は配付した地元伝説はA4の1枚のみで、「総合的な学習の時間」の調べ学習に沿うように、図書館での資料収集のための時間を確保した。しかし、休暇時期の閉館時間の制約から、②第二回以降、学習者が調べる上で必要となるであろう資料を、学習者に代わって講師側で収集したものと、地元伝説に関連する歴史資料を配付することとした。これはあくまでも時間的制約のためである〔今後、小・中学校で実施する場合には、関連資料の図書館やインターネットでの調べ学習の時間を十分にとることが望ましいと考える〕。

次に、本稿を執筆するに当たり使用した被験者からのデータの収集について述べる。①第一回は、全体の講義終了後に自由記述で、感想文を求めた。②第二回以降は、自由記述による感想文に加えて、①第一回の感想文に基づき作成した5段階の評定項目を持つ調査用紙を作成し、アンケート調査をしたことである。

図1「創作物語作成のフローチャート」には、二回分の実施を踏まえて、グループによる共同作業がどのように物語創作にかかわるかを図示してある。「読書力」・「表現力」・「想像力」・「創造力」など、物語創作で養われると想定される能力を併せて表現した。

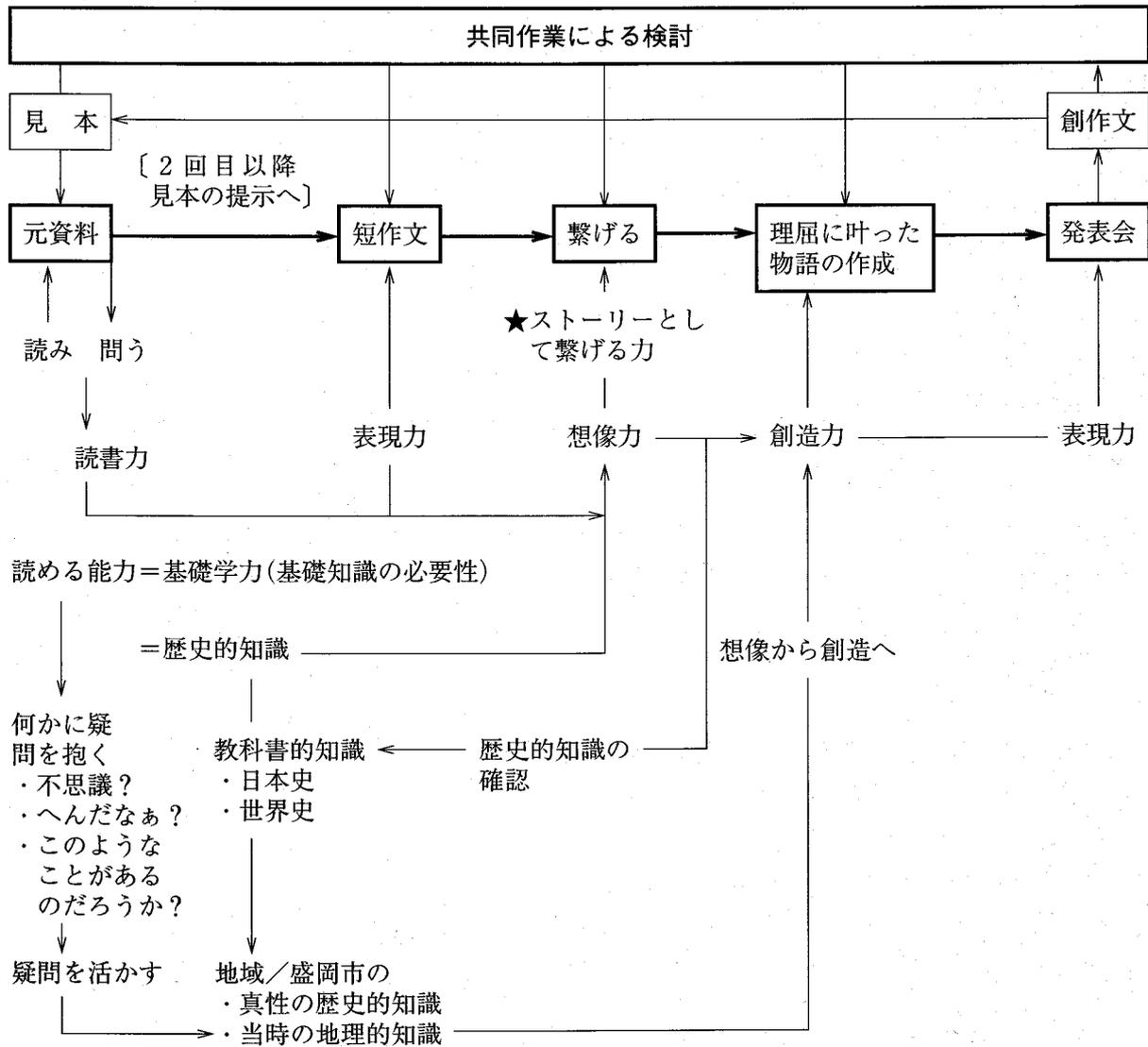


図1：創作物語作成のフローチャート

## 5 結果

### (1) 物語創作についての受講生の全体的好意度

②第二回以降は、末尾に掲げる5段階アンケート調査とは別紙にて、記名方式で「物語の創作についてお聞きしますということで、非常に楽しかった(5)、楽しかった(4)、普通(3)、楽しくなかった(2)、全然楽しくなかった(1)」の調査をした。その結果、②第二回は、「非常に楽しかった(5)」が全受講生44名のうち26名、「楽しかった(4)」が14名、「普通(3)」が1名、無記名3名おり、平均値は4.61(SD=0.54)であった。

③第三回のそれは、全受講生21名のうち無記名1名を除き、「非常に楽しかった(5)」が13名、「楽しかった(4)」が7名おり、平均値は4.65(SD=0.49)であった。

①第一回は初めての物語創作のため5段階による評価を求めなかったが、感想文である自由記述の意見を整理した結果、受講生51名のうち、物語創作について積極的に賛意を表明している者が38名、そうでない者が13名おり、割合では約75%の受講者が物語創作を好意的に受け止めていた。



06	お連の伝説が盛岡にあったことを初めて知った……………	4.9	0.3	4.8	0.5
07	お連のいた頃の盛岡の様子を知らないことに気づいた……………	4.7	0.7	4.8	0.6
<p>「総合的な学習の時間」において調べ学習を行うことが多いのですが、その調べ学習をいっそう深めるためにこの物語創作という方法を導入することにしました。この方法について、あなたはどのように思いますか</p>					
08	調べる目的がより明確になる……………	4.5	0.5	4.5	0.6
09	調べたことの活用が図れる……………	4.6	0.5	4.6	0.6
10	調べ学習で終わるより、ずっと楽しいと感ずるはずだ……………	4.8	0.4	4.7	0.6
11	総合的な学習の時間の自ら考える力の育成と共通する……………	4.5	0.6	4.5	0.7
<p>伝説「お連女と首塚」等と学生の創作例やほかの関連資料を講師側から提示されて</p>					
12	まっさらな物語を作成するより、抵抗感無くやれた……………	4.2	0.9	4	0.9
13	歴史資料を元に事実を考えると、創作物語を考えること によって、より見えない部分や考えが深められる良い方法 ある……………	4.6	0.5	4.5	0.6
14	資料収集の目的を達成した時、発見の喜びがある……………	4.5	0.6	4.5	0.6
15	協力することが楽しかった……………	4.6	0.6	4.5	0.7
16	学ぶ喜びを味わえた……………	4.5	0.5	4.4	0.7
17	登場人物や主人公の心の有り様を想像することがとても楽し かった……………	4.6	0.6	4.6	0.6
18	配付資料は興味を持てる内容だった……………	4.4	0.7	4.5	0.7
19	お連女等の物語をより身近に感じた……………	4.3	0.7	4.4	0.6
20	盛岡の歴史を知ることができた……………	4.8	0.4	4.5	0.6
21	資料収集により、新しい発見があった……………	4.6	0.6	4.5	0.5
22	歴史を紐解きながら街を歩いてみたくなった……………	4.4	0.7	4.1	0.7
23	時代小説的なものを創作することになったわけだが、『時代 考証』ということが、いかに大切か分かった……………	4.6	0.6	4.6	0.6
24	当時の事物、風物、習慣など書いていくにしたがって、知ら ないことが分かった……………	4.6	0.6	4.5	0.6
25	自分が気づかないイメージを持つことができた……………	4.5	0.6	4.5	0.6
26	自分にもこういう力があるんだと発見した……………	3.9	1	3.6	0.8
27	お互いに様々な意見が出され、その意見から自分の中に閃ヒ ラメきがあった……………	4.2	0.5	4.2	0.8
28	新しい考えを学べた……………	4.2	0.7	4.5	0.5
29	自分の発想力や表現力が不足しているのに気づいた……………	4.3	0.9	4.6	0.6

30	この時間は本当に楽しかった……………	4.6	0.5	4.4	0.5
31	楽しい充実感を味わった……………	4.5	0.5	4.5	0.7
32	良い経験だった……………	4.9	0.3	4.8	0.5
33	様々なアイデアや想像力の豊かさが楽しかった……………	4.6	0.5	4.4	0.6
34	思った以上に、意外なほどに集中することができた……………	4.4	0.6	4.4	0.7
35	創作というものに挑戦できた……………	4.5	0.7	4.4	0.6
36	自分なりの作品を自由に書くことができて独創性が発揮できた……………	3.8	0.8	3.8	0.9
37	文章の練習になった……………	4.2	0.9	4.1	0.8
38	出来上がると達成感で満たされた……………	4.8	0.4	4.6	0.6
39	作り上げる過程が楽しかった……………	4.6	0.5	4.5	0.6
40	創作の難しさを痛感した……………	4.4	0.8	4.7	0.6
41	同じ物語でも、登場人物を加えたり、登場人物に背景を持たせることで、話の視点が変わっていくことに気づいた……………	4.6	0.6	4.7	0.5
42	物語にリアルさを持たせるためには、かなりの資料集めを必要とするだろう……………	4.8	0.6	4.7	0.5
43	資料の読み込みが大切である……………	4.8	0.6	4.8	0.4
44	一人では思いつかないような発想、構成の仕方に気づいた……………	4.9	0.4	4.7	0.5
45	物語を作る過程で班の先生方をより近いものと感じた……………	4.9	0.4	4.6	0.6
46	班の人達とコミュニケーションする中に沢山の宝物を得た……………	4.8	0.4	4.5	0.7
47	グループで作っていく中で、お互いの良さ、個性のようなものが垣間見え、刺激を受けた……………	4.8	0.4	4.7	0.6
48	グループで作成したことにより、様々なイメージが膨らみ、個人では広がらない物語になり、作品的に良かった……………	4.9	0.4	4.6	0.5
49	団結できた……………	4.8	0.4	4.5	0.8
50	共同作業を進めていく中で得るものが有った……………	4.8	0.4	4.5	0.7
51	年齢の違い、歴史に詳しい人、他から見た盛岡など、それぞれの力が活かされて、とても良かった……………	4.6	0.5	4.5	0.8
52	苦しい作業の中から人間関係ができた……………	4.7	0.5	4.4	0.7
53	力が強い人が居ると、話の流れがそちらに向く……………	3.5	0.8	3.7	0.8
54	グループ作成は良いアイデアだと思うが、初対面では厳しいと思う……………	2.8	1.2	2.8	1
55	最終日に他の班の物語を聞かせてもらえて良かった……………	4.8	0.4	4.7	0.5
56	もっと時間に余裕があれば、楽しい創作物語ができたと思う……………	4.4	0.8	4.1	0.9
57	次は、この方法を子供達とやってみたい……………	4.1	0.9	4	0.9

被験者数は③第三回が21名、②第二回が44名であった。「06 お連の伝説が盛岡にあったことを初めて知った」のm=4.9③,4.8②の通り、地元出身が多かったにもかかわらず、江戸時代のキリシタン殉教については知られていないことが分かる。次に、「総合的な学習の時間」にかかわる「10 調べ学習で終わるより、ずっと楽しいと感ずるはずだ」のm=4.8③,4.7②の通り、物語創作の方法を導

入することは、調べ学習をより一層有効にする方法ではないかと思われる。また、グループ作成について、項目「47 グループで作って行く中で、お互いの良さ、個性のようなものが垣間見え、刺激を受けた」のm=4.8③,4.7②や、項目「48 グループで作成したことにより、様々なイメージが膨らみ、個人では広がらない物語になり、作品的に良かった」のm=4.9③,4.6②とに見られる通り、グループ作成は意義深かったものと思われる。

#### (4) 配付資料について

ここでは回を追って実施しての印象を最初に述べる。提示する歴史資料については、一回目は地元伝説のみであり、時間の制約から二回、三回になるにつれ関連資料を増やしたのであるが、あまり多くを配付するよりも、地元伝説プラス10頁程度のより少なめが良いのではないかと思われた。グループ・メンバー全員が配付資料を十分に読み理解し、グループ討議が十分できるようにすることが大切と考えられることと、より想像的に新しい筋立てを作るためである。配付資料が増えるにつれて、資料内容に依存する傾向が強かった。末尾に添付する受講生の作品(資料二 金濱圭子著『もりおか』)は、①第一回のものであり、たった1枚の配付資料と、自分で収集してきた関連資料とに基づいて、生き活きとした物語の創作がなされていることを示している。第二回以降に、この第一回の創作文を例示したが、創作文の出来ばえの良さに感動して創作刺激となった反面、逆に、考えが制約されるという意見が受講生からあった。

#### (5) 残された課題

小・中学生を対象として物語創作が可能かどうかを調べることが、残された課題の一つである。地元伝説素材を提示して、調べ学習を経てから、物語創作が実際に実施可能かどうかを、小・中学生を対象として確かめる必要がある。②第二回以降に、現職の先生方を対象にして、小・中学生の場合に、何年生から実施可能かを調査した結果は、表3の通りであった。

表3：何年生から物語創作が可能かを調べた結果(数値は回答人数)

実施回・日	小学生学年						中学生学年			高校生学年			回答人数
	1年	2	3	4	5	6	1年	2	3	1年	2	3	
②二回 2003/8/8	0	0	2	9	18	6	4	4	1	0	0	0	44人
③三回 2004/1/9	0	1	1	8	5	1	2	2	0	1	0	0	21人
	0	1	3	17	23	7	6	6	1	1	0	0	65人

表3の通り、小学5年生の23名を頂点に、小学4年生が17名である。国語の教科書では小学4年生から「物語を書こう」という目次がある。第三回の受講生の意見には「小学3年生から可能。本校では総合学習で調べたことを子供達が脚本化し、学習発表会で演ずるようになって3年ぐらいたちました」、「小学5年生から可能。もっと簡単な創作劇なら小学1年生から可能」、「高校から可能。学校差があると思う。中学生でも訓練しないと無理。附属小なら可」、さらに「小学4年生から可能。目的は違いますが、総合の時間のグループ・ワークで生徒に物語創作の課題をさせた事があります」という意見があった。

創作させる目的での実施状況の学校現場での調査を始め、物語創作で行うか、脚本化を図るかによって、学年はどのように変わるかを含めて、物語創作の効用と小学校での実践効果を調べることが、次なる課題といえよう。

## 5 おわりに

講師の立場から振り返り、①第一回の受講生は物語創作に対して最初は戸惑いを見せたものの、次第に熱気をおび、グループでの討論も活気を帯び、創作に集中しているのが分かった。講義終了日には、受講生から盛大な拍手を頂いた。②第二回、③第三回も同様に、受講生が実に楽しく創作に集中しているのが分かった。同じように最終日には感謝の言葉を頂戴し、講師冥利に尽きた。私自身は講義における話はあまり上手ではないことを考えると、講義の中の課題として物語創作を投げかけるといふ、いわば一種の問いの出し方が受講生の学習を促進しているという点で、教師の学習者に向けた問いの重要性に改めて気づかされたといえる。大学における教員を対象とする研修が増大する今日、現職の先生方を対象にして物語創作という課題を実施してみたい。必ずや研修が非常に有意義で楽しいものになるものと確信する。

注記：本研究は、①第一回の物語創作の実施結果を、日本教育工学会第19回全国大会において報告した内容に、その後二回分の実施結果を踏まえて記述したものである。①第一回の報告については、日本教材学会基礎研究部第15回研究会（2003年9月4日15時～17時30分）において発表し、基礎研究部チーフ長谷川栄氏並びに出席したメンバーから貴重な意見を頂いた。ここに記して感謝を申し上げる。

## 引用・参考文献

〔本研究の口頭発表〕

長谷川栄 2003 日本教材学会基礎研究部第15回研究会報告（於：日本教材学会会議室）

大河原清 2003 調べ学習への物語創作の導入：「総合的な学習の時間」における調べ学習をより深いものにするための一方法の提案（調べた内容をネタにする物語創作の方法）

日本教育工学会第19回全国大会講演論文集 pp. 159-160.

〔地元伝説「お蓮女と首塚」およびキリシタン殉教の関連文献〕

深沢紅子・佐々木望編 1957 不來方城の虎 岩手の民話（日本の民話2） 未来社 Pp.41-47.

（斎藤正・深沢紅子・佐々木望編 1974 不來方城の虎（篤焉家訓その他より） 津軽・岩手篇（日本の民話1） 未来社 Pp.265-271.）

平野直 1976 お蓮女と首塚 岩手の伝説 津軽書房 Pp.34-35.

岡田章雄 1955 キリシタン・バテレン（日本歴史新書） 至文堂

田中澄江 1993 キリシタン迫害の跡をたずねて 中央出版社

吉田義昭編 1964 盛岡の切支丹 p.63～, 小鷹刑場 p.65, 飢饉 p.72～, 洪水・水害 p.76 図説 盛岡今と昔・郷土資料写真集第7集増補改訂 盛岡市公民館

吉田義昭・及川和哉編著 1983 図説上巻盛岡四百年・江戸時代編城下町一武士と庶民 郷土文化研究会

山田野理夫 1975 南部のキリシタン 岩手歴史散歩・みちのくの史と詩 創元社 Pp.79-91.

## 〔江戸時代の状況を知るための関連文献〕

- 樋口清之 1986～1988 逆・日本史1～4 祥伝社  
 鈴木喜代春 1977 飢餓の大地三本木原 鳩の森書房

## 〔物語を書くための関連文献〕

- 山上浩二郎 (社会部) 1995.1.16 短く楽しく作文教育 朝日新聞朝刊  
 石田佐久馬監修・若林富男・名取俊夫・宮本嘉美・小山久仁子著 1993 物語や感想文を書いてみよう・教科書にでてくる詩や文の読みかた・つくりかた (6) ポプラ社

## 〔物語を書くための参考になる教科書の記述〕

- 栗原一登・井上靖・飛田多喜雄監修 1992平成4年 「物語を作ろう」 国語五下大地 光村図書  
 Pp.80-83.  
 野地潤家・大岡信・浜本純逸ほか21名 2001平成13年 げきを作ろう／メディアをつくる 小学校国語五年下／みんなと学ぶ Pp.52-59.  
 野地潤家・大岡信・浜本純逸ほか21名 2001平成13年 わたしたちの「今」を伝えよう／本を編集する／メディアをつくる 小学校国語六年下／みんなと学ぶ Pp.46-55.  
 角野栄子・倉持保男・西本鶏介・本堂寛ほか34名 2002 しょうかいしよう、心をひかれた 人物新しい国語六上 Pp.24-33.  
 金田一春彦・長谷川孝士ほか23名 2001 グループ雑誌をつくろう／共同編集・制作 現代の国語3 Pp.188-195.  
 宮地裕ほか29名 2001 物語を掘り起こそう／インタビューで取材する・物語を伝え合おう／まとめ方を工夫する 国語2 光村図書 Pp.206-224.

## 〔小説作法関係〕

- 秋田喜代美 2002 読む心・書く心 (文章の心理学入門) 北大路書房  
 保坂和志 2003 書きあぐねている人のための小説入門 草思社  
 加藤恭子編著 1998 ノンフィクションの書き方 (上智大学コミュニティ・カレッジの講義と実習) はまの出版  
 宮原昭夫 2001 書く人はここで躓く・作家が明かす小説作法 河出書房新社  
 三田誠広 2000 天気の好い日は小説を書こう・早稲田大学小説教室 集英社

## 〔本論関係〕

- S.I. ハヤカワ・大久保忠利訳 1965 思考と行動における言語第二版 (岩波現代叢書) 岩波書店  
 Woolfolk, A.E., P.H.Winne, N.E.Perry1998 Educational Psychology (CANADIAN EDITION), Ontario: Allyn and Bacon.

## 資料一 提示した地元の伝説

## お蓮女と首塚

寛永十一年（一六三四）五月、徳川幕府のつたキリシタン禁制によって、東北のメツカといわれた伊達藩には、あまたの殉教者を出したが、南部藩は伊達藩とちがって、丹波小十郎の朴の木山金山の事件があつたくらいが落ちで、あとはさしたることもなく、この禁制の波を切りぬけている。

これは決して藩内に信奉者がなかつたという証にはならない。地下に潜んで信仰の灯をともしつづけたかくれキリシタンの人々が、元禄（一六八八―一七〇八）の世に至つても絶えなかつたらしく、盛岡川原町の材木商岩井与市郎なるものが、異教徒たること発覚して捕えられ、小鷹の刑場の露と消えている。

このものにお蓮という娘がいて、当時お城へ、行儀見習にあがっていた。父の非業の死をきくと、罪は罪ながら、みじめな姿を諸人の目にさらしおくのが、子としてたえがたく、お蓮は女的身ながら夜闇に紛れて、ひそかにお城を抜け出し、鬼気迫る刑場へ忍びこみ、父の首を盗みだした。

その帰る途次、道筋の寺門をたたいて父の供養を頼んだが、後難を怖れて、うけいれてくれる寺とてなかつた。

「かなしやお父上、あなたは天国とやらにおのほりです、さぞかしご満足でしょうが、娘の私には、このまま見過ごすことができません、はて、なんとしても、お父上のご供養がしたいもの……」

血に汚れた首をかかえて、ようやく川原町（現在の西大通）まで辿りついたとき、うれしや菩提寺円光寺の脇門が、小開きにひらいていたので、急いで駆けこみ、供養の程をねがった。

ときの円光寺住職は、高德のきこえ高かつた良寛和尚、お連女の孝心をきくと快よくひきうけて、ねんごろに回向をしてやり、お連に自首して出るようすすめて、城中へ送りかえしてくれた。

ときの藩主は、南部三十世行信であつた。行信は直々これをきかれて、罪は罪ながら、お連の孝心にいたく感じ入り、この者がかくれキリシタンではないかという疑いははれると、側女として奥に入れ、のちに三十一世を継ぐ世子信恩を産せて、お家の栄えをもたらした。「篤焉家訓」の伝えるところである。

また、かくれキリシタンを回向した良観にも、お咎めなど更々になく、かえつて異教のものをよくぞ成仏させてやつたとお賞めがあり、今にこの伝承を伝える苔むした与市郎の首塚が雨露風雪にさらされながら、円光寺脇門傍に、ひっそりと鎮まっている。

（ところ・盛岡市川原町 円光寺）

## 資料二 創作例 もりおか 金濱圭子

ローマの石畳を歩き続け、最終目的地バチカン市国にようやくたどり着いた。ミドリの頬は紅潮している。小さい頃からの憧れの地であり、わずかなものにだけ与えられる司祭になるためのプログラムが、この地で閉じられるからである。

「ローマ法王のもとでキリストの教えを学べるなんて…。」

ここまで、数々の試練があった。それを乗り越えられたミドリ、年にたった一人、彼女にだけ与えられるプログラムである。

「神のお導きに感謝します。」

聖人達の石像が並ぶ広場や郵便局をすぎ、中世を想わせる衛兵が両脇に控える門を足早にくぐると

「チャオ！」

陽気な声があった。美術館を見に来たであろう、イタリア婦人だ。

「ちやお」

ミドリも返したが、心はもうこの道の先に行っている。私を引き留めないで、といわんばかりの形相である。お構いなく婦人は話しかける。

「ニホンカラキタノデスカ？」

「はい」

「ニホン シツテマス」

（きつと、この人は日本語を習っているのよ。私と話して使ってみたいんだろうけど、まっぴらよ。私は急いでの。おばさん、分かって）

「キリシタン シマバラ アマクサ モリオカ」

「そう、昔のことね。島原、天草…。もりお か？」

「モリオカ」

「？ ？ ？」

「ココニ、カイトマス」

婦人は、まさしくミドリの行く先を指さした。ローマ法王庁である。

「サヨナラ」

「さよなら…」

ミドリには見当もつかなかった。「もりおか」。いったいなにが起こったというのか。九州生まれの彼女にとって、島原は得意分野である。しかし、盛岡はどこにあるかさえも分からなかった。それをいきなりイタリア人の、しかもその辺にいるようなおばさんに指摘されたのだから、面食らった。

「ま、いつか。ここまでの日本でのプログラムにさえ出てこなかったんだから。聞いたこともないし。」日本人であるミドリが知らなかった。勝ち気な彼女にとって、本来許し難い事実なのだが、それを忘れさせるくらい、期待で胸を膨らませていた。

\* \* \*

「盛岡…これだわ」

ミドリは叫んだ。忘れたというものの、頭のどこかにこびりついていた「もりおか」に出会ったのだ。

「一六二四年一月一日、盛岡で三人のキリシタンが処刑された。転宗を迫る拷問さえも無駄であり、ついに首をはね、体を二つに切って虎の檻に投げ込んだ…虎の檻…。」

なんという、すさまじさ。考えただけでもぞつとする。

次々に出てくる手紙を前にし、ミドリは、いたたまれなくなった。

\* \* \*

あたり一面の雪。今年は特に多いらしい。

「岩手県盛岡市」

ミドリの吐く息が白く凍る。プログラムを終え、帰り着いた地は古里九州ではなく、東北であった。ミドリの心に何かがひっかかった。どうしても、この目で見なければ気が済まなかったのである。

「円光寺、首塚。ここだわ。」

ひっそりと雪に覆われた丘に、ローマで見た資料を思い返す。

「親孝行な娘、お蓮が父上の成仏を思い、キリシタン弾圧で処刑されたその首を盗み出す。首は虎の檻に投げ込まれていたが、お蓮はひるむことなく飛びこむ。姿を見つけ、止めに入ったお役人は、そのカンボジア生まれの虎に襲われるが、お蓮は無傷である。しかも父上の亡骸も虎は見向きもしなかったようである。この神の奇蹟をなんと感謝しよう。菩提寺である円光寺に回向を何とか頼み込み、極度の緊張と歩き続けた疲労とで、お蓮はその場に倒れ込んだ。」

「よく知っておる。」

首塚を見つめ続けたミドリは、住職が近づく気配さえも感じなかった。

「え、ええ。ローマにあった資料を読みました。」

「なに、それは初耳じゃ。遠く、ローマにあったか。」

少し、驚く住職の姿に一年前の自分の姿を重ねていた。知らなかった事への意地がミドリをここへ連れてきたが、そんな心の固まりが自然に解けていくように住職の話に耳を傾げた。

「お蓮は利発な子でな。父上の回向もねんごろにすみ、当時の住職に自首を勧められたわけじゃ。もしかすると、キリシタンの娘じゃ、さらにお咎めがあるかもしれない。悩みはしたものの、すべては神のお導き、神が守ってくれる。住職の言うとおりにしたわけさ。ただし、自らもキリシタンであったことだけは隠し続けた。」

「お蓮もキリシタンだったのですか？」

「そうじゃ。父上は信仰を貫いたが、お蓮は、どうしても生きねばならなかった。病気の母上、一人を残すわけにはいかなかったのさ。」

ミドリは母を想い、急にいたくなかった。この道を許してくれた母も、今は一人で暮らしているはず。元気でいるだろうか。ミドリは円光寺を後にした。

資料三 吉田義昭・及川和哉編 一九八三 盛岡四百年 P 84

盛岡城下殉教の記録がローマ政庁に残っている。要約すると、

寛永元年（一六二四）十二月十八日のこと、南部の主都盛岡で三人の切支丹が処刑された。中でもマグダレアンと称する一婦人に裁判所（御白州）の役人達は種々の論証や、また彼女に種々の拷問を加えて傷を負せ転宗させようとしたが駄目で、遂に首をはね、更に体を二つに切つてそのまま人間の肉を食べなれた虎の檻に投げ込んだのでした。然し虎は不思議にも臭を嗅いだだけで三日間も遺骸に近づこうとしなかった。役人は遺骸を取り去ろうとしたが、虎は猛烈に飛びかかって来た。異教徒達はこの奇蹟をかくそうとしたのであった。この驚くべき奇蹟は異教徒達を狼狽させ、マグダレアン女の生命を賭した信仰の名誉となった。（一六二七年日本よりの書翰バジェスの五八二章・デレプレス一八〇章）